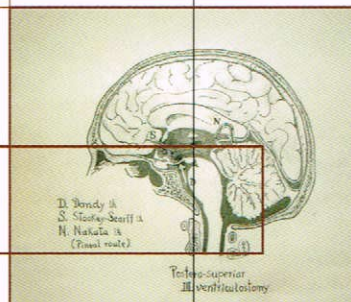
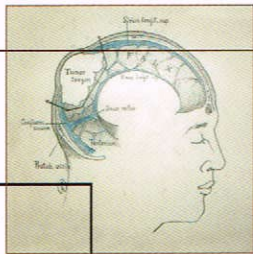


新潟大学脳神経外科

同窓会誌

Vol.31



新潟大学
脳神経外科学
教室同窓会

物 故 会 員

故 中 澤 省 三 先生

御命日 平成 25 年 6 月 9 日

ご遺族様連絡先

〒 151-0071

東京都渋谷区本町 4 - 20 - 10

中 澤 英 樹 様

電話 080-5548-6488



中澤省三先生

新潟県野木村(

湯川町) 湯川

中学校から

理学科一組に入

事により新潟大

学で解放思想が

盛んな中、理

論にも可

算課程修了、同

年の頃から生

化学教室に

入ったことが

あったことか

また、中田

先生の医学部

卒業、

中田先生の

勧めで、日本

の

第一臨床講堂で

手術などの臨床

の一部として行

った中田教授であ

ることは広く行

った。一般外科、脳神

経。しかも診療

が確実な方法、態

度もたれ、これ

を診療の中で、

テーマは「意識障

害」であるもので

中澤省三先生を偲ぶ

矢嶋浩三

(昭和35年入局)

中澤省三先生は昭和4年9月30日、新潟県中蒲原郡曾野木村(今の新潟市)に生を受けられた。新潟明訓中学から昭和24年、旧制(官立)新潟高等学校理科一組に入学された。間もなく戦後の学制改革により新潟大学プレメジカルコースとなった。当時解放思想がもてはやされており、先生もマルクス理論にも可成り傾倒されたい。昭和26年同課程修了、同年新潟大学医学部に入学された。この頃から生化学の分野に興味がありだったようで、4年後に入学した私たちにも、学生の間から生化学教室に出入りしている生徒がいるとの話を聞いたことがある。

また、中田みづほ先生が主催されていた「まはぎ」の医学部俳句部「若萩」に属し、3年間中田、高野素十先生に指導をうけられた。昭和30年(1935年)医学部卒業、1年間のインターン後、憧れていた中田先生の大学院医学専攻科(脳神経外科)入られた。日本の脳神経外科は昭和23年新潟大学の第一臨床講堂で研究会の形で発足した。しかし脳手術などの臨床はごく限られた大学で外科診療の一部として行われており、その先頭におられたのが中田教授であった。教授は外科医のトレーニングは広く行うべきであるとの方針から、入局者には一般外科、脳神経外科に加え麻酔の訓練も行われた。しかも診療や手術には患者を中心とした着実、確実な方法、態度で行うべきであるという精神をもたれ、これを徹底的におしえられた。この忙しい診療の中で、先生が中田教授から頂いた研究のテーマは「意識障害における生化学的研究」という裏熱たるものであったが、これをまず「麻酔剤の

脳代謝に及ぼす影響」という具体的な課題として研究を開始し、学位を取得された。この後も研究の継続のため東京大学脳研究所生化学島蘭教授に指導を受けられたが、この時教室におられた女性が瑠薇子夫人であり、昭和37年4月に結婚された。

また、この研究が糸口となり昭和39年(1964年)7月、あの有名なRasmussenやPenfield教授のおられるMontreal Neurological Instituteの生化学Quastel教授の下にResearch Fellowとして留学された。Quastel教授は実験結果に対し非常に厳格で、他の人の論文であれ自分の教室の研究結果に対しても必ず追試せよとされ、次に進むと言う慎重な態度を取られた。先生はそのハードルを超えられ、その上、土・日曜日にはに自分で考えられた脳浮腫の研究をも行われた。そこで先生は浮腫脳蛋白の代謝をアミノ酸転入速度より求め、これが2~3倍に増加しているとの新発見をされた。なんと代謝亢進が見られ、常識とは異なっていたのである。この研究成果がWalker教授の認めるところとなりJohns Hopkins大学に移り研究を継続した。多くの成果を上げられ昭和42年5月帰国された。

昭和47年(1972年)日本医科大学脳神経外科初代教授に選出され、5月に就任し、7月より診療を開始した。しかし、官学から来たものにとって私学の雰囲気は異なり、医局員の数も少なく、他科との人間関係や支援も乏しく、苦勞の連続であり、先生みずから当直をする状況であった。開設後3年経っても教室の基礎は固まらなかった。このつらい時期に先生から「正しいことを真面目にやっていたら、当然道は開けてくれるものだ」と中田

名誉教授から励まされたよ」とお聞きしたことがある。以後も困難の連続であったが、学生および医師教育を主体として、患者さん中心の医療、研究、中国医師への教育および国内および国際の学会活動などを精力的に行われた。

昭和56年(1981年)4月に胃ガンとなり手術を受けられ、抗ガン剤療法を行った。本当に幸運にも再発は見られず全治された。

その後20数年の努力の結果、70余名の優秀な教室員と20余の首都圏関連病院を持ち数多くの論文、学会発表を行うことが出来た。

先生は非常に遠慮深く、個人的なことで教室員を煩わすことはなかったが、その御退職時の会は特別になさらず、退職最後の平成7年(1995)年3月30-31日の「意識障害の治療の研究会」および「植物症、尊厳死、脳死に関するシンポジウム」の最後の懇親会で皆に別れを告げられた。

この日を境に、日本医科大学関連のものとは縁を絶って仕舞われた。進まれたのは、医学生の時手ほどきを受けられていた、俳句の世界であった。余程の御覚悟と御執心があったのであろう。私が先生にお会いできるのは、ほとんど新潟大学の同門会の席だけとなった。ある時「先生、俳句の修行は如何ですか」とお伺いしたら、「医学の学問と同じだよ。季題一つにしる、来歴があるし、一つ一つの言葉に多くの意味があり勉強しなければ何一つ出来ないよ」とおっしゃり、「句会に入り同人にならないと勉強は出来ないよ」とお聞きした。やっぱり俳句も一生をかけなければ出来ない世界であると実感した。猛修行をされたのであろう。果たして全国規模の句会で高得点を取られたことを仄聞した。4年後の1999年には「風土」新人賞を受賞された。2004年、第一句集「すずかけの木」発表された。

2005年(平成8年)、以前に親族のご不幸があった際の、在来仏教の在り方に疑問を感じておられたのか、近くの平塚聖マリア教会(日本聖公会=

英国国教会)にて、洗礼、堅信を受けられた(教名ルカ)。

さらに、2010年には、かねてより肺ガン療養中で先生が懸命に看病されておられた最愛の瑠璃子夫人を失った。この間、第二句集「あたたかき手」を発刊。更に11月、国より瑞宝小綬章を授与されたが、お祝いはされなかった。やる気も湧かない状況であったものと拝察する。以後一人暮らしとなり、体の不具合に悩ませられながらも、俳句への精進は続けられた。

2013年(平成25年)3月先生を囲んでの会合を持つとの話が持ち上がり、連絡を取ったところ「喉に腫瘍があり1月から加療中である。良くなったら集まりましょう」とのご返事があったとのことであった。所が、5月28日日本医科大学の新入生歓迎会に出席したところ、医局長から「先生は胆道癌で日本医科大学付属病院に御入院中で、現在黄疸が出始め、あと1週間もすれば昏睡状態になる」と内科主治医から言われているとの話を伺った。本当にびっくりし、翌々日の30日お見舞いに参上した。病室にお伺いしたところ、軽い黄疸はあるがお元気そうで、小さな声ではあったが、すごく穏やかで、しっかりした口調でお話し頂けた。初めにお会い頂けたことの感謝と、ご無沙汰をお詫びすると「今、人を選びながら会っている。お互いに忙しかったからね」といわれ、同門会の会合のことをお話しすると「みんな寂しく会いたがっているんだね」とのこと。その上で「私はやるべきことはやった。後悔はない。だから未練もない。現在6月4日に出る句集を最も楽しみにしている。出来たらお送りしますよ。これは息子の英樹が編集をしてくれ、装丁をしてくれた。恥ずかしいけれど私の好きなクレマチスを描いた下手な絵が載っていますよ」といわれた。その他種々のことをお話し頂けたが、お疲れのご様子なので早々退出した。最後に握手させて頂いた。うすい暖かさが手に残り、悲しかった。

堅信を受けられた(教名
かねてより肺ガン療養中
ておられた最愛の瑠璃子
第二句集「あたたかき手」
瑞宝小綬章を授与され
った。やる気も湧かない
する。以後一人暮らしと
せられながらも、俳句へ

先生を囲んでの会合を持
連絡を取ったところ「喉
療中である。良くなった
ご返事があったとのこと
日本医科大学の新入生
、医局長から「先生は腫
病院に御入院中で、現在
間もすれば昏睡状態にな
われているとの話を伺っ
翌々日の30日お見舞いに
したところ、軽い黄疸は
さな声ではあったが、す
た口調でお話し頂けた。
の感謝と、ご無沙汰をお
びながら会っている。お
」といわれ、同門会の会
と「みんな寂しく会いた
と。その上で「私はやる
はない。だから未練もな
句集を最も楽しみにして
ますよ。これは息子の英
丁をしてくれた。恥ずか
レマチスを描いた下手な
いわれた。その他種々の
お疲れのご様子なので
手させて頂いた。うすい
った。

2-3日して、句集が送られて来た。第三句集
は「クレマチス」と表題がある。表紙の水彩画が先
生の自筆であるが、中田みづほ先生の絵を思わせ
るものがある。内容を見ると、今までの句集より
も更に高いレベルに達しておられたように思われ
る。本の後半には「高野素十のこと」など数編の

エッセイが載っている。句集の中で自薦十句が挙
げられているが、その中で

「門火焚く妻の知らざる日々を生き」
が最も胸に迫ってくる。

中澤省三先生は平成25年(2013年)6月9日、静
かに天に召された。享年83才であった。

懐かしい医局忘年会演芸大会一替え歌

小林 啓志

(昭和40年入局)

昭和40年代の忘年会は植木幸明教授のもと、研究室対抗の演芸大会などが行われ、和気藹々であった。ある年の助教授、講師、図書室、第三研究室の替え歌を思い出して書いてみます。

司会 倉松陸子さん

○佐藤進先生

床ずれ療情(知床旅情、森重久弥)
しり骨の岬に 赤らみのさす頃
思い出しておくれ 床ずれのことを
書いて崩れて 骨に及べば
はるか治療に てこずるものを
二番は佐藤先生自ら作られて、
治療の時は来たりぬ 脳外の病室にも
治療車出てゆく グリベニン積んで、
とかありましたが、薬の宣伝が強くて歌いにくく
思っただけ、続きませんでした。

○上杉 清氏

病室たそがれ(よこはまたそがれ、五木ひろし)
病室たそがれ 止まった呼吸
瞳孔不同に チャアノーゼ
空しい点滴 主治医の泪
この人は 行って行ってしまった
この人は 行って行ってしまった
もう帰らない

裏町 スナック 酔えないお酒
舞れる脳髓 飛び散る血潮
尽きない後悔 術者の泪
あの人は 行って行ってしまった

あの人は 行って行ってしまった
もうよその人

○中井昂助教授

私の動脈瘤(私の城下町、小柳るみ子)
頭蓋骨こじ開けて 覗いた硬膜の下
どこにあるのか動脈瘤 私の動脈瘤
したいともいえずに 黙ってついてくれた
助手する君に なぜか目をふせながら
心は燃えてゆく

動脈瘤見つけたら 癒着のくも膜はずす
ネック求めて右左 私の動脈瘤
破っちゃいけないと そっとヘラを進める
血が出るたびに なぜか汗噴き出るよ
手先もふるえるよ

中井先生も気に入られて良く歌ってくださいましたが、次の歌とのつながりで大事な一番の後半は伸びませんでした。

○岡田耕坪先生

誰かさんと誰かさん
(誰かさんと誰かさん、ドリフターズ)
誰かさんと誰かさんが 動脈瘤
マイクロ使って いいじゃないか
僕には順番 来ないけど
いつかはかっこ良く 動脈瘤

マイクロのピントを 合わせます
覗いたレンズの その先の
手相にしっかり でてました
来年こそどっさり 動脈瘤

○小林啓志

無給医の夢は夜ひらく

(圭子の夢は夜ひらく、藤圭子)

赤く咲くのは 急患の血

青く変わるは 顔の色

どうすりゃいいのさ この患者

俺は夜悩む

十五 十六 十七と

今週泊まりが 多かった

夜はどんなに 辛くとも

俺は夜稼ぐ

昨日中央 今日桑名

明日は大学 泊まりこみ

せめて寝たいや 検討会

俺は夜学ぶ

○中沢省三講師

リサーチャーの意地(女の意地、西田佐知子)

こんなにデータが 出にくいものなら

二度とリサーチ したくはないわ

一度はじめた 脳浮腫なれば

やめちゃならない

男の意地なの

二度と愚痴など こぼしやしない

愚痴れば未練の 涙をさそう

夜の脳研 しじまの中で

心冷たく ネズミを殺す

リサーチ魂 静かに燃える

もちろん飛びっきりの一等賞でした。仲間内では折に触れて歌ってきましたが、書き残しておいてといわれたこともありました。

富山県立中
日に杉山義昭
る(月勤務)と
初の脳神経外
大学脳研究所
で、全国でも
す。第1例目

後列左よ

前列左よ